メディア（新聞）の中の布引丸事件・中村スキャンダル事件

同朋大学文学部　金山泰志

中村弥六研究会（高遠シンポジウム準備報告）

本研究の目的

- 布引丸事件前後期（明治30年代）の新聞がどのように中村スキャンダル事件を作り出していったのかを明らかにする。
- なぜ新聞（メディア）に着目するか→現在に至るまでの中村弥六のネガティブイメージが、当時のマスメディア（新聞）によって作られたと考えられるため。
- 中村弥六の「背任行為」とは→布引丸事件において、中村が準備した弾薬が廃弾であり、さらにフィリピン独立軍から預かった弾薬代金の多くを横領したとされるもの。

【具体的には･･･】

1．当時の新聞紙界の状況を概観

2．実際の紙面（中村弥六に関する記事）の紹介

※関連記事の収集については、中村弥六研究会メンバーによるもの。

先行研究

- 佐々木隆『メディアと権力』中央公論新社、1999年
- 片山慶隆『日露戦争と新聞』講談社、2009年
- 山本武利『近代日本の新聞読者層』法政大学出版会、1981年
- 山本武利『新聞と民衆』紀伊國屋書店、1973年

→新聞史に関する研究蓄積は膨大。一方で、中村弥六のスキャンダル事件を扱った専論は管見の限りない。

明治30年代の新聞界概観（1）

- 布引丸事件前後期は、さまざまな新聞が活躍する時代。一方では、福沢諭吉以来の伝統を誇る『時事新報』や、陸羯南の率いる『日本』のような1880年代に創刊されたクオリティ・ペーパーが存在。
- また、1872年以来のもっとも長い歴史を持つ『東京日日新聞』、徳富蘇峰が主導する『国民新聞』や、池辺三山が主筆を努める『東京朝日新聞』など、当時の政府と近い関係にある新聞もあった。
- 他方、大隈重信が党首を務める憲政本党の機関誌であった『報知新聞』や島田三郎が社長であった『毎日新聞』のように、政府に批判的な民権派の新聞も存在。

明治30年代の新聞界概観（2）

- 『読売新聞』（1874年創刊）のようなニュース本位の庶民向け新聞も。
- 憲政本党（もとの進歩党。明治31年11月発足）系の新聞としては、『報知』『都』『読売』があげられ、準憲政本党系としては、『東京二六新報』『日本』がある。
- 1890年代には政府に批判的ではあるが、従来の新聞とは異なる新聞も登場。それは、有名人の女性問題や金銭問題を追窮するイエロー・ジャーナリズムでありながら、当時としては「リベラル」であった『万朝報』や『二六新報』のような、主に労働者に読まれていた安価な新聞。

新聞の発行部数と読まれ方

・山本武利『新聞と民衆』→「日露戦までの時期では〔中略〕『二六』が『万朝報』とともに十～十五万部で第一、二位をきそい」（133頁）

・読まれ方→現在のように自宅で定期購読されることもあったが、その他にもさまざまな読まれ方をしていた。

・右表は、片山慶隆『日露戦争と新聞』14頁より。

	発行部数	
	1903年11月	1904年10月
『萬朝報』	87,000	160,000
『二六新報』	142,340	32,000
『時事新報』	41,500	55,000
『東京日日新聞』	11,700	35,000
『東京朝日新聞』	73,800	90,000
『国民新聞』	18,000	20,000
『報知新聞』	83,395	140,000
『都新聞』	45,000	60,000
『日本』	10,000	12,000
『毎日新聞』	14,000	8,000
『週刊平民新聞』	—	4,200

表１　東京における各新聞の発行部数
山本武利『近代日本の新聞読者層』（法政大学出版局、1981年）412頁の別表５(A)と(C)をもとに作成。『週刊平民新聞』の発行部数だけは同書156頁を参照。なお、『二六新報』は1904年４月に『東京二六新聞』と改称した。

【参考】主要新聞系統図と明治20年代の発行部数（どちらも前掲佐々木『メディアと権力』より）

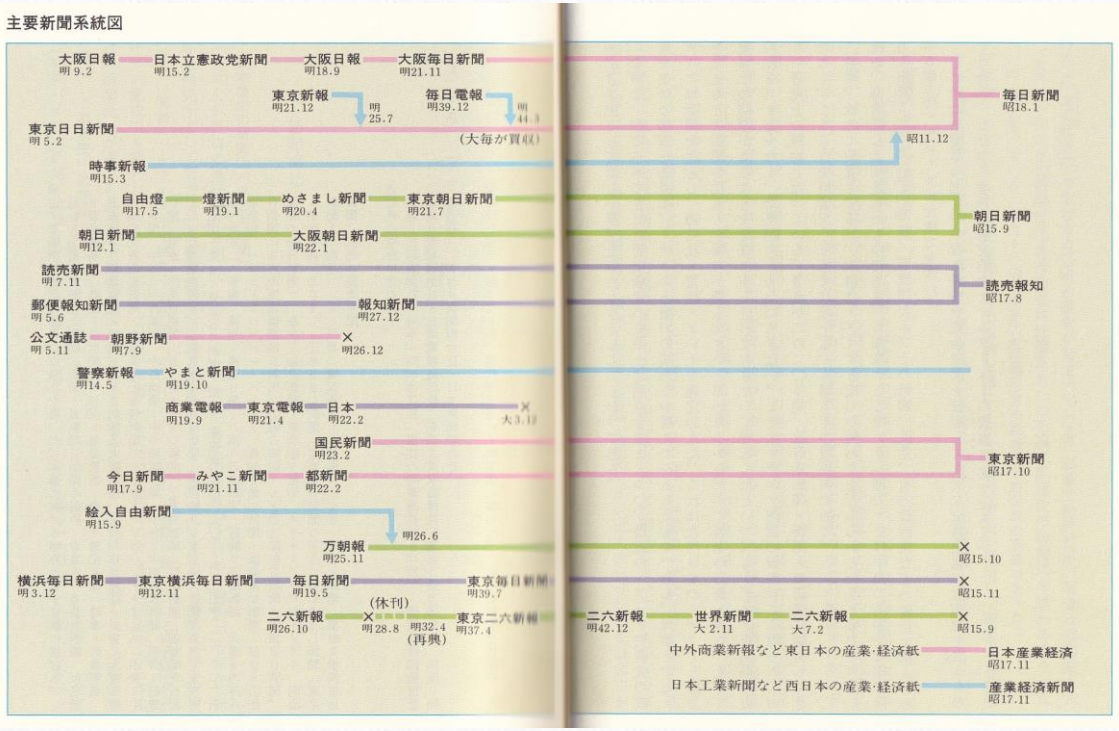

表1 東京発行日刊紙の月間配布数（明治21年12月）

題号	月間配布数	東京府下	地方	地方百分比	在外邦人	外国人
郵便報知新聞	521,326	330,200	189,784	36.4	900	442
時事新報	334,998	175,968	154,488	46.1	3,989	553
東京日日新聞	304,334	149,286	152,506	50.1	1,762	780
東京朝日新聞	237,424	181,278	56,059	23.6	87	—
毎日新聞	205,165	138,568	64,787	31.6	874	936
朝野新聞	172,449	78,759	92,529	53.7	918	243
東京電報	107,852	45,305	61,685	57.2	443	419
東京新報	80,600	28,600	51,800	64.3	200	—
公論新報	58,337	41,225	16,987	29.1	125	—
やまと新聞	559,985	469,863	89,992	16.1	130	—
絵入朝野新聞	380,447	163,340	216,977	57.0	130	—
改進新聞	372,361	325,695	46,516	12.5	150	—
読売新聞	330,346	296,652	33,304	10.1	130	260
絵入自由新聞	162,495	121,680	40,765	25.1	50	—
東京絵入新聞	154,125	85,797	68,172	44.2	156	—
みやこ新聞	141,698	120,692	21,006	14.8	—	—
中外物価新報	113,026	85,499	27,215	24.1	312	—
合計	4,236,968	2,838,407	1,384,572	32.7	10,356	3,633

鵜飼『朝野新聞の研究』（原出『官報』明治22年2月14日号）付表より加筆・再構成して作成

本課題で着目すべき新聞は『万朝報』と『二六新報』

- 中村弥六のスキャンダル記事は、『万朝報』『二六新報』へ内田良平がリークしたため。
- 内田良平の自伝→「余その軽挙を戒め「弥六は鉄拳位にて満足せらるべきものにあらず。彼の政治的生命を断たざる可からず」と、即ち万朝報記者園城寺清（えんじょうじ・きよし）及び二六新報記者権藤震二（ごんどう・しんじ）の両人を個々に招き、布引丸一件の真相を発表せり。万朝報は十数日に亘りほとんど全紙を挙げて弥六の非行を暴露し筆誅せり。二六新報もまた万朝に譲らず大攻撃を開初したるため、天下の問題となり、弥六は遂に国民党〔ママ〕を除名せられ政治家の生命を絶つに至りたり」（内田良平「硬石五拾年譜」『日本人の自伝11』所収、277頁）
  ※内田がなぜこのような行動にでたのかは、今後の大きな課題である。

『万朝報』と『二六新報』について

『万朝報』

- 記者のかたわら探偵小説の翻案作家として活躍していた黒岩涙香が1892年（明治25）に創刊。広範な大衆読者の興味と正義感をセンセーショナルな記事で煽った新聞。上流貴顕のスキャンダルを暴露し、反権力的な庶民の人気を集めた。

『二六新報』

- 東京帝大卒の秋山定輔（あきやま・ていすけ）が1893年（明治26年）に創刊。三井財閥などを攻撃するほか、労働者懇親会の開催など派手な企画で、1903年（明治36）には14万部を超える東京一の発行部数を達成。

原敬の『万朝報』『二六新報』への視線①

- 『原敬日記』明治43年10月16日条
- 【前提】東京市の電燈料問題で『実業之世界』の野依秀市が勾留された際、原は桂首相から野依が電燈料の三割引き下げを行わなければ関係者の会社に筆誅を加えると脅迫して金銭を取っていたと聞いていた。
- 「近来此種の雑誌〔実業之世界〕少なからず。〔中略〕裁判の結果にあらざれば判明せざるも悪習なりと思う。先年万朝又は二六新聞などが此の手段にて成功せしに因り如此悪風を生じたるものの如し」

→『万朝報』と『二六新報』を同列視

原敬の『万朝報』『二六新報』への視線②

- 原は『万朝報』のように社会的影響力の大きなマス・メディアによって悪評が広まってしまうと、それが誤報であっても、手間暇と金のかかる面倒な裁判によって正す外はなく、実際上回復は難しい。そこで、マス・メディアはそれ自体が一つの権力・暴力と化しており、対抗困難な代物となりつつあると見ていた。
- 原によれば、黒岩涙香率いる『万朝報』こそは悪徳メディアの洗礼を拓いた張本人であり、マス・メディアの影響力に物をいわせて相手の反撃を封じ込め、それによって影響力をいっそう肥大させていると捉えられていた。

新聞とスキャンダル

- メディアによるステレオタイプ化した人間把握が蔓延しはじめたのは明治20年代に入ってから。※森有礼と内村鑑三不敬事件など
- ある人物（政治的・社会的な存在感のある人物）についてプラス・マイナス（ほとんどマイナス）の価値判断を加えて類型化・単純化したうえで記事を連発すれば、ある意味で政治キャンペーンになり、読者にとっては一つの娯楽になる（世にいう「他人の不幸は密の味」）。

→新聞の発行部数の増加によって、「大多数の人間」が読者に加わりはじめた結果、読者の構成が変わってきて、それが紙面にも反映しはじめた時期（明治20年代以降）でもある。

相馬事件で大成功した『万朝報』

- 相馬事件（明治16年～明治28年）→多数の新聞が長期にわたって無実の人々を「毒殺犯」「主殺し」と糾弾しつづけ、ついには冤罪を生んだばかりか政官界にまで波及が及んだ、新聞史上に特筆すべき事件。
- 『万朝報』の明治26年の年間部数は約907万部で、東京紙としては『東京朝日新聞』『都新聞』に次いで第三位。新興紙の立ち上がりとしては十分すぎるほどの部数で、キャンペーンは読者の獲得に大きな効果があった。その後も『万朝報』はスキャンダリズム＝キャンペーンを社会悪追及の名のもとにつづけてゆく。

課題の提起

- 図式化した人間把握は冤罪まで生み出し、真実の発見とはおそよかけ離れたものであった。
- そして多くの新聞はそのことに無反省・無神経であり、記事は実際上、娯楽的情報として消費されていった。

→中村弥六の「背山事件」も同様の文脈で捉えることが可能か。

【参考】『万朝報』の読者層

- 『万朝報』の読者層→商工読者、知識人読者に加えて下層読者（職工、職人、車夫、配達人など）にもまんべんなく支持されている（発行部数の多さに繋がる）。また、下層読者は、上層社会に対する日常の欲求不満を上層人物への人身攻撃記事を読むことである程度解消することができた。
- 同時代人の回想（白柳秀湖〔しらやなぎ・しゅうこ〕）
「〔『毎日』や『二六新報』とともに〕黒岩周六氏の『万朝報』などをよんで少年の血をわかすことを教へられた。弱者の味方をして強者の横暴を挫き、その社会悪を訐発（けつぱつ）するといふやうな生活が男子としてどんなに生甲斐のある生活であるかといつたやうなことを考へるやうになつて来た」

→下層読者だけでなく、知識人読者も同じ。

『万朝報』1900年12月3日付「進歩党の煽乱家」

- 「今更に問題たる布引丸事件その他に就いて、彼の行為の隠れたるを現わして、彼の為人（ひととなり）を明白にすべし」「背水将軍と唄はれ一時三百議員中血性に富める硬骨漢とまで思はれし彼の為人は最早分明にして一点の疑ひを存するの余地なかるべし」「かねて一攫（いっかく）万金の機を窺える中村」「〔布引丸事件によって〕事に当れる中村は少しも損耗するの理なく、イナ多くの利益を占めて旧債を償却し終わりし上、今も二万円の現金預けをなせるほどなり」

→人格攻撃にまで発展。「金」の問題は「社会悪追及」の格好の的に。

【参考】実際の紙面

（二）　明治三十三年十二月三日　（月曜日）　萬朝報　第二千五百八十號

倫敦電報

▲黒港破壊製造所の爆事（時五十分倫敦發）

▲有毒麦酒の遺棄

▲南阿英軍總督

▲クルーゲル佛國を去る

▲製鐵者の遊去

ロイテル電報

▲南阿英軍司令官

▲クルーゲルと佛國

▲クルーゲルと同情

▲杜軍敗る

内地電報

▲札幌の出火

▲山林整理と河川修繕費

▲鈴木鳥取縣警部官

▲政友會新聞支部發會式

▲仔々友居

▲平島松尾

▲小松宮殿下

▲東宮紀御安産期

▲進歩黨の内訌亂家

▲貴族院

▲星

東京地方裁判所

過熱していく中村弥六報道

- 『二六新報』1900年12月7日付「中村彌六氏除名せらる」
「最も厭忌（えんき）すべき罪名の下に進歩党を除名せられたり」「ポンセ及び孫逸仙等を欺瞞して不正の利を獲得し己の口腹を満たせり」
- 同上「彌六氏の申分」
「『彌六不肖と雖も犬養等が新聞に書かせた様な醜陋（しゅうろう）事を敢てする程耄碌はせざるなり云々』事実果して如何尚精探を遂げて報道を怠らざるべし」

→中村彌六の憲政本党除名でも炎上は止まらなかった。

- 『万朝報』1900年12月8日付「さらに中村彌六の反省を促がす」
「中村彌六既に除名せらる、彼れ若し前非（ぜんぴ）を悔て謹慎せば吾人は寧ろ憐れみて再び其の過を追窮し死屍（しし）に鞭つが如きごとをせじ。されど彼れ未だ漸悔（ざんげ）の心なく動もすれば暴言強辞して其の非を蔽（おお）はんとす、吾人は茲に幾（いく）びも彼の非行を追記して飽まで彼の反省を促さゞるを得ず」
- 『万朝報』1900年12月12日付「彌六に對する制裁」
「中村彌六は既に進歩党より除名せられたり然れども是れ単に其の党□に対する一政党としての制裁のみ一般社会は更に彼に対して峻厳（しゅんげん）なる制裁を加る所なかる可らず」

→むしろ意図的にスキャンダルを煽っている。

『二六新報』のバッシングの契機

- 『二六新報』1900年12月10日付「彌六氏の服罪」
  「吾徒（わがと）は（中略）中村彌六氏の弁解を聴き之を社会に紹介して社会と共に最後の大判決を下さんとし彼が除名せられたる即日社員を派して之を糺（きゅう）せり彼は大に陳弁して進歩党の非理不法を天下に訴へんとて次日即ち去る七日を期し社員と介し巨細（こさい）の事実を述ぶべきを約せしに拘らず後に至り会見を謝絶し今に至るも何等の弁解を為さんとせず依是見之彼れ中村彌六氏は進歩党本部の宣告に服したるものにて社会に向つて之を言ひ解く能はざる弱点ある者と断ずるの外なし嗚呼中村彌六は竟（つい）に一個陋劣（ろうれつ）の大詐偽漢なりし歟（か）社会が彼に瞞（まん）せられたるも亦久しと謂ふべし」

→『二六』がバッシングに方向転換した契機。7日にも「一切の事相を明にし是非の判断を世に一任せんとす」と中村は言っており、結果何も弁解がなかったことが、中村に落ち度があると決定づけられた要因に。

他紙との比較①

・『国民新聞』

→自由・平等・平民主義を掲げた徳富蘇峰が1890年（明治23年）に創刊。青年知識人層の支持を得た。日清戦争後は、徳富が桂太郎に接近したため官僚・軍人の支持を得た（桂内閣の御用新聞といわれたことも）。

- 『国民』1900年11月27日付「憲政本党内の紛擾」「近来に至りては旧改進派の一人犬養毅氏と、旧革新派の一人たる中村弥六氏との間に衝突絶えず、両氏互いに軋轢していつ破裂するやも計り難きほどの有様に立ち至れりという」「その近因は中村弥六氏が比律賓事件に関する金銭上の関係より来たり、この事に就いては犬養氏と中村氏とは互いに罵り合い、党内の平和攪乱の惧れあれば、党の両袖（りょうそで）間にもはなはだ憂慮の念を抱くものありと、目下両者の間に奔走し、調停を試みんとしつつある由なるが」

→冷静な筆致。人格攻撃などはない。

他紙との比較②

- 『読売新聞』1900年12月6日付「中村彌六氏除名問題」
「進歩党内に犬養毅氏対中村彌六氏の衝突問題興起りて紛雑を極め居れることハ豫て耳にしたる所なるが今其の理由を聞くに事の起りハ彼の布引丸一件に在り最初中村氏ハ比律賓のポンセ支那の孫逸仙等の連中より武器購入費として十五万両を受取り武器一切ハ大倉組より数回に南洋に送附せんとの約束にて第一回ハ浅野所有汽船布引丸をして送附せしめたるに端なく布引丸ハ上海附近にて座礁沈没し南洋に於ける一揆旗揚の時期をも失せしより孫等ハ此の計画を放擲し残額の請求をなし来りたる為め中村氏ハ曖昧なる証書を附与して一時を糊塗せんとにせし孫等の請求漸次烈しく遂に犬養氏ハ中村氏の偽造証書処分を詰責したる末中村氏の処分方を神鞭、山田（喜）両氏に委任したり」

他紙との比較③

- 『東京朝日新聞』1900年12月7日付「中村彌六氏除名される」
  「中村彌六氏は昨日午後進歩党総務委員会の決議に依り除名の処分を受けたり其原因は氏が曾て布引丸事件に付き紳士として有るまじき挙動ありし為め過日来氏の政友は累を党に及ぼさんことを恐れ脱党の勧告を為したれど氏は頑然之を拒絶したる」

→あくまで事実関係を報じており、『万朝報』と『二六新報』に見られるような人格攻撃までは見られていない。

中村彌六への人格攻撃はさらに過熱

- 『万朝報』1900年12月11日付「彌六の毒皿主義」
「彼の図太き卑劣なる根性は猶悔悟頓覚する能はずして」「生意気なる野心を抱き」「彼を筆誅したる新聞社に喰て懸り誹毀の告訴をも提起し兼ねまじき勢なりといふ飽までも済度（さいど）し難き畜生道に陥れるもの哉」
- 『万朝報』1900年12月12日付「彌六に對する制裁」
「要するに彼れ彌六は亡命客の義挙を援くるを名として却て其の血を吸ふたるの人也、憐れむべき亡命客が辛苦の余に蓄積したる美挙の財資を騙取して其の私腹を肥したるの人也、私印私書偽造を敢てしたるの人也、没義の人也、隠忍陋劣（ろうれつ）真に其の比類を見ざるの人也、若し斯くの如き人を弁護するの国民あれば、其の国民は斯くの如き人を伍するを恥とせず、斯くの如き人と其の類を同くするを自白するの国民也」

社会復帰できない様に徹底的に叩く

- 『二六新報』1900年12月10日付「孫逸仙、彌六に談判す」
「嗚呼中村彌六は竟に一固陋劣の大詐偽漢なりし歟」「嘗て該事件に関係したりし人々も我が国民の義気の下に庇護（ひご）しつゝある亡命士を欺き懐を肥やす如きは国を売るの悪行にも比すべき所為なれば飽く迄彼の罪跡を糾明し再び世に立つ能はざる様せざれば已まず」

→社会復帰できない様に徹底的に中村を叩くという意思。
→下線部の「関係者」が「内田良平」であることが下記の記事からもうかがえる。

- 『二六新報』1900年12月17日付「孫對彌六事件の成行」
内田甲氏「彼れの如き不義没道漢をば我が社会より逐斥し支那人に対する吾々の面目を立て且は社会の公徳を維持せんとするが終極の目的なり金を出したら衆議院議員を辞さしめ今後公共上に手も口も出さゞるべきを誓はしめんとするものなり」

報道の収束と『三十三年の夢』

- 『万朝報』1900年12月29日付「彌六事件の一段落」、『二六新報』1900年12月29日付「孫對彌六事件の落着」といった記事を最後に中村弥六関係の報道は収束。
- 翌々年、『二六新報』で「三十三の夢」（宮崎滔天）の連載開始（1902年1月30日～6月14日）

→布引丸事件における中村弥六の「背任行為」が改めて詳述。

→当該期の中村弥六評価をネガティブなものとする影響力大。また、このスキャンダルを「背山事件」として後世まで記憶に留めさせた。さらには、後年の研究（中村弥六に触れられたも）にも多大な影響を残すことに（詳しくは、高綱論文、円谷論文を参照のこと）。

→一方、宮崎滔天と中村の関係性は後年に好転（和解）している 。

【参考】後年の『読売新聞』での中村弥六評価

- 『読売新聞』1909年1月21日付、熱鉄火「代議士人物評（十二）中村彌六君（上）」
「人も知る如く、彼れは国誼を破り敵手を欺きて一挙巨大の利をセシメ得たり、事は孫逸仙の暴動に関係し、空船沈没事件として世上に喧伝したるを以て、茲に詳説するを避くべしと雖も、彼れは之れが為めに、犬養君の為めに馘られ、嘖々（さくさく）たる背水将軍の名、一朝にして泥土に委（い）し去れり」

→『万朝報』や『二六新報』で報じられた内容が一般化（定説化）している。

まとめ①

- 中村弥六スキャンダル事件を考える場合には、第一に当時の新聞界の状況を理解する必要があり、特に『万朝報』と『二六新報』のメディア特性を捉えておく必要があった。
- 『万朝報』も『二六新報』も、スキャンダリズム＝キャンペーンを社会悪追及の名のもとに行っており、それによって広範な読者層の支持を得ていた。中村弥六のスキャンダル記事もその延長線上に捉える必要がある。
- 当時から既に、特定の個人を叩くことが、一種の娯楽ともなっており、一度「炎上」するとその「火消し」が大変であることは、現在と変わりがない。

まとめ②

- 中村は後年、『布引丸事件秘録』を残し、没後に『人の噂』という雑誌で「布引丸事件真相」と題して特集記事も組まれた。しかし、犬養毅や平山周、吉野作造などの一定の人物の注目は集めたものの、『人の噂』というマイナーな雑誌ゆえに、一般レベルの中村弥六評価に大きな影響を与えることはなかったと考えられる。
- 太平洋戦争中のフィリピンとの関係から、顕彰記事が表れだすと、中村弥六の評価にも変化が見られるようになるが、一方で知識層や研究者の間では、『二六新報』で連載された「三十三年の夢」の中村弥六描写・評価が今なお影響力を残しているという状況にある。